

## 『世界の片隅』にみるナイポールの 新しい物語形式について

武 藤 哲 郎

*Times Literary Supplement* (1994年9月2日号)で V. S. ナイポールは「真実を伝えること」(‘Delivering the truth’)と題してインタビューに答えている。その中で彼は『世界の片隅』(*A Way in the World*, Alfred A. Knope, 1994)において〈新しい物語形式〉(new narrative forms)を試みていることを認め、「自分は30年前と同じ本は書けなかった。作家は集めた素材(マテリアル)に見合うように書き方を変えなければならない。物語形式を〈創造〉することは意味あることで、小説に必要なのは素材の創造だけではない」と語っている。

『世界の片隅』はエッセイ、記録作品、あるいは口述歴史といろいろなジャンルの短編から成っている。主として〈事実〉の記録であるが、登場人物も違えば時代も異なっているのでそれぞれの章は互いに独立して見える。しかしナイポールはあえてこの作品を〈小説〉と呼んでいる。拡散する事実をつなぎ合わせ、独立しているかのように見える物語の素材を結び付けているのがイメージとしてのリンク(links)である。このリンクの働きによって単なる事実の羅列であったものを有機的にまとめ〈想像的真実〉すなわち小説を構築していく語りがナイポールの意図した〈新しい物語形式〉である。

### I

『世界の片隅』は9つの章から成っている。それぞれの章の内容を簡単に見てみたい。第1章は「序章：遺産」(‘Prelude: An Inheritance’)と題され、18歳でトリニダードを離れたナイポールが6年ぶりに故郷に戻ってきた時に、ある学校の女性教師から聞いた話を中心になっている。いつしか語り手は彼女になっている。学校でメーデーの祭りに生け花コンテストを行うことになり、審査員としてレオナード・サイドが適当だということになった。さっそく彼女はその件でサイドに頼みに行くが、彼が死体を葬式のために飾っているのを見て驚く。2年目、彼女は同じように頼みに行くが、今度はサイドが女性たちの前であの毛むくじゃらの手でケーキの小麦粉を練っているのを見て再び驚く。3年目、彼女がサイドの自宅を訪れると彼は病気で寝ていた。ベッドの天蓋には花の刺繍がしてあり、わきの花瓶にはきれいな花が生けられてあり、彼は緑色の絹のパジャマを着ていた。イスラム教徒であるにもかかわらず壁にはキリストの美しい絵が掛けられてあった。彼女がショックを受けたのはサイドの美への異常なまでの執着であった。その病的なまでの美への執着を彼は誰から受け継いだのか、ナイポールは推測しかねた。そして自分のルーツにも思いをはせる。

我々は先祖から受け継いだ特質の全てを理解することは到底できない。時として我々は我々自身すら知らないことがある。(A Way in the World, p. 11)

第2章「歴史：魚の糊の臭い」(‘History: A Smell of Fish Glue’)は、ナイポールがイギリスに留学する前の一年間1938年から1939年にかけてトリニダード政府の役所(Red House)で証明書発行のアルバイトをしていた時の話が語られている。その台帳が魚の脂肪から作られた糊で止められていたのでこのタイトルが付いた。役所では上級官吏でトリニダード島北東の村出身の黒人ブレア(Blair)も働いていた。彼はナイポールよりも年上で、将来有望な役人になるはずであったが、突然彼はその経歴を捨てて政治の世界に身を投じる。ナイポールが再び故郷に戻ってきた時、もう昔のトリニダードではなかった。役所の前の広場では黒人たちが集会を開き、虐げられてきた彼らの過去を話題にしていた。彼らの憎しみの矛先は白人たちよりも島の人口の半数を占め、政府の要職を得ているインド人に向けられていた。その後トリニダードに革命の嵐が吹き荒れることになる。近年移住してきたアラブ系イスラム教徒たちによって役所が占拠され多数の死傷者を出した。死臭が何日か首都に漂ったニュースを聞きナイポールはあの「魚の糊の臭い」を思い出す。しかし、トリニダードで土地の奪い合いによって血が流されたのは今回が初めてではない。トリニダードにも歴史があった。

歴史を遡れば、そこには出来事の大きなつながりがある。広場での洗礼。ベンチの上の気の狂った黒人。インド人の貧困。植民地。荒野。アメリカインディアン。そして発見。(Ibd., p. 42)

第3章は「新しい服：書かれていない物語」(‘New Clothes: An Unwritten Story’)である。〈書かれていない物語〉というのはその後の章にも見られるが、事実の殻の内部でナイポールの空想が働いていることを示す。この章では、彼が南米ベネズエラの隣国グアイナ(Guyana)を旅行した体験がもとになっている。物語の主人公はただ〈語り手〉(the narrator)とだけしか述べられていない。彼の国籍も名前も明らかにされていない。読者は読み進むうちに、彼が宗教活動を隠れ蓑にグアイナの奥地に住むアメリカインディアンを扇動し、海岸地帯に君臨する黒人勢力に反旗を翻す目的を持った革命家であることがわかってくる。彼にはガイドとして二人のアメリカインディアンが付く。マテオ(Mateo)とルーカス(Lucas)である。彼らの旅は数日続く。マテオは父親がその土地の死霊(Kainaman)に取り付かれて死んだことを語る。原因は父親が外国人から西洋の〈服〉を買ったためだった。実はルーカスも死霊に取り付かれていた。マテオは〈語り手〉にルーカスをイギリスに連れて行って欲しいと頼む。そうすれば死霊がもう付きまとわなくなるからである。やがて彼らは目的の村に付く。見るとアメリカインディアンの女たちが青い煙の中でカッサバ(cassava)からパンを作り、それを草の屋根に置いていた。彼は「私はこの人々たちが好きだ。彼らを傷つけるために私はやって来たのではない」と思う。この描写は『世界の片隅』の見開きの絵に描かれている。その絵が『到着の謎』(The Enigma of Arrival, 1987)のキリコの絵のように、作品が書かれる前に存在していたかどうかは定かではない。しかし、ナイポールが古代から今だに異国の文化に荒されていない文化を持つ土地に〈エデンの園〉を見いだしていたことは確かである。外界の文化が時を流れさせ、変化を起こさせ、人々にアイデンティティを失わせるとナイポールはいつも考えていた。



人間が自分の世界を十分に知り、全ての木や花や、食べ物や毒、そして全ての動物を知り、全ての道具を完成させ、全てが調和の中に存在し、外界から何も比較するものが入り込んでこないとき、いったい人間は時間の流れという概念を持つことができようか。(Ibd., p. 56)

語り手を出迎えた村長は、昔黒人たちが〈金〉を探しにやって来たが草を焼き払って追い返したことを語り、彼はどこから来たのか尋ねる。語り手は自分がイギリス人であることを始めて明かす。村長は祖父がイギリスに渡ったこと、イギリス人がたびたびこの地にやって来て家を建てる約束をしたがそれが今だかつて果たされていないことを語る。最後に訪れたイギリス人は、約束が果たせない詫びとしてイギリスで最新流行の服を村長の祖父に送ってきた。村長はその服を語り手の目の前に持って来る。彼はそれが最新どころか350年前のチューダー王朝の古い服で〈古い裏切り〉を思い起こさせる物であることに気付く。

第4章「船客：30年代のある人物」(‘Passenger: A Figure from the Thirties’)の〈ある人物〉はイギリス人フォスター・モリス (Foster Morris) のことである。1930年代は数多くのジャーナリストが船で未知の世界トリニダードにやって来て旅行記を書いた時代である。中でもモリスは、油田で働くグレナダ島 (Grenada) からやって来た黒人たちのストライキを中心に *The Shadowed Livery* (1937) を書いている。少年時代にこの本を読んだナイポールは概して批判的であった。モリスはストライキの中心人物の黒人バトラー (Butler) あるいは彼を取り巻く連中をこの本の中で描いているのだが、モリスは彼らの言うことを全て信じ、まるでイギリス人と同じように〈根〉を持った人間として過大評価し過ぎているとナイポールには思えた。

我々には背景はない。過去もない。我々にとって過去は祖父母と共に終わった。それ以前は無である。空から我々を見れば、海と藪の間の小さな家に住んでいる我々が見えるであろう。それがこの地に移植させられた我々の真実である。我々はただそこにいて、浮かんでいるだけである。(Ibd., p. 81)

ナイポールはロンドンのBBCで働いている時、偶然モリスに出会う。ナイポールはトリニダードを題材にシリアスな小説を書いている、それをモリスに読んでもらった。彼はすぐにその小説は諦めたほうがいいと言った。ナイポールは彼を憎んだが、彼の正当性は認め、心機一転して主人公の少年を自分が生活していた〈通り〉のレベルまで下げ、具体的かつ平明な文章によって、短い連続したエピソードに〈意味〉を重ねていく書き方を取った。彼は具体的にこの本の名は上げていないが、1959年に出版された『ミゲル・ストリート』(*Miguel Street*) だと思われる。ナイポールはグラハム・グリーン (Graham Greene) を1967年にインタビューするが、グリーンにとってモリスは若い時代目標にした作家であったが彼はもう小説を書くことも、またその能力もなくなったと聞く。グリーンにとってモリスの書いたトリニダードの本は怠惰なものであった。ナイポールは自分が小説を書けずに悩んでモリスに相談したことを思い出す。彼も自分と同じように悩んでいたのだった。結局イギリス人が書いた *The Shadowed Livery* はトリニダードの本当の姿を写しているものではなかった。

第5章「逃亡中」(‘Oh the Run’) はバトラーを取り巻く危険な革命家の一人であるレブラン (Lebrun) の話である。彼はトリニダード生まれのパナマ育ちの黒人で、カリブ海の革命に関して最初の本を出版した人物である。レブランはカリブ海のある国で革命を起こそうと目論んでいたが、その国の大臣に目を付けられ生命の危険を感じてアメリカに逃げていた。ナイポールが彼を突

際に見たのはトリニダードで行われていた黒人の集会で彼が演説していた時だった。ナイポールが彼とその後直接知り合うようになったのは、最初の本（*The Mystic Masseur*, 1957）を出版した時、ソ連に逃げていたレブランがこの作品の書評を書いて彼に届けたことによってである。趣旨は、表面的な〈軽さ〉の裏に虐げられた人々を描いていて〈革命的〉というものであった。ナイポールにとっては寝耳に水で、狙っていたのはまさにその表面的な〈コメディ〉であった。彼はその後レブランとロンドンの夕食会で会うことになる。予想していたように、60歳を越してはいたが、精力的でその流暢な話ぶりには豊かな知性を感じられた。しかしナイポールは、ほとんどの植民地が独立した現在レブランは知人宅を転々とする落ちぶれた革命家にすぎないという印象も受ける。ナイポールは彼の「黒人の肌を脱ぎ捨てて白人になりたい」という潜在願望を見抜くのである。

6章「紙、タバコ、亀」‘A Parcel of Papers, a roll of Tobacco, A Tortoise: An Unwritten Story’の舞台はトリニダード島の沖合い、オリノコ川（The Orinoco）の河口で、時代は現代からはるかに遡って1618年である。前半はウォルター・ローリー卿（Sir Walter Raleigh）と彼の船医（surgeon）の会話からなる。〈書かれていない物語〉であるから史実の殻の内部にはナイポールの空想が働いている。ロンドン塔に投獄されていたローリー卿はこの地に〈金〉を見つければ王の許しが得られるし、見つけれなければイギリスに帰って処刑される運命になっていた。彼にとっては二度目の遠征であったが、ジェームズ一世のきつい命令でベネズエラとトリニダードを支配しているスペイン人と戦ってはならないことになっていたのになかなか自由に金を探しに行けない。彼は重い病気で余命いくばくもなかった。ローリー卿は古い友人のケイミス船長（Captain Keymis）に400人の部下を付けてオリノコ川を遡らせる。彼からの連絡は長い間なかった。ケイミスは約束を破ってスペイン人支配下の村を襲撃したのだった。その村のアメリカインディアンの村長の息子ドン・ジョセ（Don José）が小さな船で紙やタバコや亀と一緒にローリー卿のもとにケイミスによって送られてくる。

この章の後半は、連れてこられたドン・ジョセの語りとなる。ローリー卿はケイミス船長が金を見つけ出せなかったことを知るが、彼を最も落胆させたのは彼の息子の戦死だった。その後ケイミスは船に戻るが、ローリー卿に厳しく責任を追求されて自殺してしまう。ローリー卿はドン・ジョセを連れてイギリスに戻る。ドン・ジョセにとっては長い間夢みたイギリスであった。ここでナイポールはイギリスに渡った若い頃の自分の体験をすり合わせているように見える。故郷の広い海、高い空を懐かしみ、ロンドンの狭い部屋の壁に故郷の空を見いだそうとして、ドン・ジョセは以下のように語る。

故郷、つまり私が知っている最初の世界に戻ることができなければ、私は死んでしまいそうだった。（*Ibd.*, p. 211）

第7章「新しい男」（‘A New Man’）は再び時代を現代に戻して、ナイポールがベネズエラに行く途中の飛行機で隣に座ったベネズエラ人のマヌエル・ソルザノ（Manuel Sorzano）の話である。彼は、実際のところトリニダード生まれのインド人で、「新しい土地で、新しい名前を持ち、新しいアイデンティティを持ち、新しい家族生活を送り、新しい言語を話していた」のである。彼らを乗せた飛行機は前章でローリー卿の船が待機していた海の上を飛ぶ。ソルザノの首にはローリー卿が見つけれなかった〈金〉の大きなペンダントが掛かっていた。

第8章「荒廃の湾で」（‘In the Gulf of Desolation: An Unwritten Story’）は時代がまた遡って1806年、ベネズエラの革命家ミランダ（Francisco Miranda）の話である。彼はベネズエラ



の裕福な商人の家に育ちスペイン軍に入るが、脱走してアメリカ、イギリス、ロシアなどを渡り歩きベネズエラの解放を目指していた。念願かなって彼はアメリカ人、フランス人の義勇兵を率いてトリニダードへ渡り、イギリスの援助も得られることになってベネズエラへの侵攻は目前に迫っていた。この章の前半はミランダとトリニダードに駐留するイギリス軍将軍ヒスロップ（Hislop）との会話、そして後半はミランダとその妻サリー（Sally）との手紙のやり取りの形でストーリーが語られている。いよいよミランダはベネズエラに侵攻するがスペイン軍は反撃してはこなかった。上陸してベネズエラの民衆に自分の旗のもとに集まれと言っても、彼らは集まってこなかった。牧師によって数週間前から人々に、ミランダは異端で彼に加勢するものはすべて教会から破門するという通達が発せられていたのである。ミランダは首都カラカス（Caracas）まで進むがスペイン軍は彼らを遠巻きに包囲するだけで攻撃は仕掛けてこない。やがてフランス人とアメリカ人とのいざこざが始まり、ミランダは一旦海岸で待機している船に戻るが、それまでの辛い行軍や食料不足で病気になる者がたくさん出てきた。悪いことにイギリス軍はミランダの支援を中止する旨伝えてきたので、ミランダは再びトリニダードに戻る。彼は一時期は有名な革命家であったが、もうほとんど誰も彼のことを知る者もいなくなった。

イギリスでも、フランスでも、ロシアでも私は私の政治理念によって知られていた。それは特別な理想だった。私はいつでも注目される人物だった。今、故郷の近くに来て私は人々の目の中に私を認めていないことを知る。私はあたかもばらばらになって消えてしまう感じがする。（*Ibd.*, p. 309）

最後の第9章は「再び故郷へ」（‘Home Again’）という題が付けられている。ナイポールが東アフリカの社会主義を押し進めている国（多分ウガンダであろう）に行った時の話である。この国の大学生は、大学に入ると社会主義をたたき込まれ、大統領の思想もたたき込まれ、やがて大統領よりも急進的に社会主義を押し進めるようになっている。ある時、ナイポールはブレア（第2章で登場した黒人の革命家）がこの国に大統領のアドバイザーとして来ることを聞く。夕食会で会ったブレアの話は淀みがなく、自信を覗かせていた。しかしナイポールは、彼のその世間に向けた押しの強い性格は偽りのものと感じ取る。ブレアは自らを人種差別主義者と称し、ニューヨークで切符を買うのにもたついていた日本人を大きな声で怒鳴った話を得意げにする。昔自分が人種差別で虐げられた恨みを、ブレアは晴らしているように思われる。彼は、ある日、この国の政府のある要人を脅したらしくバナナ畑で無惨に暗殺されてしまう。そして彼の棺（ミイラにされて殻となった彼の遺体）はトリニダードに戻って行く。

『世界の片隅』は、ナイポールが1991年12月から1993年10月までに書きためておいたいくつかの短編を一つにまとめたものである。その中にはエッセイがあり、記録作品があり、口述歴史があり、多彩なジャンルの短編が寄り集まっている。しかし、ナイポールが『世界の片隅』を〈小説〉と呼んでいる以上、この作品の中心はこれらの短編の中に意識的にちりばめられた〈書かれていない物語〉であろう。場面の設定はトリニダードが中心であるが、3つのその物語で描かれている登場人物は、それぞれアメリカインディアン、イギリス人、そして黒人で、時代設定もそれぞれが現代、1618年、そして1806年と異なっている。つまり、この3つの物語は他と互いに関連を持たない完全に独立した章を構成している。しかし、この互いに独立した物語にもわずかながら接点がある。それが本稿の次章で論ずる〈服〉と〈金〉のリンクである。読者はこのリンクを意識すること

によって独立した3つの物語がまとまる方向に動き出すのに気付く。この3つの物語以外の短編はナイポールのトリニダードでの体験を綴ったエッセイであり、それらは〈小説〉へと動きだした3つの物語の〈背景〉を補う形で存在しているように思える。

## Ⅱ

第3、6、8章の〈書かれていない物語〉に登場する人物はアメリカインディアン、ローリー卿、ミランダでそれぞれ違う人物であり、時代も現代、17世紀、19世紀と異なっていた。この独立した物語を結び付けているのが〈服〉と〈金〉のリンクである。第3章ではアメリカインディアンが西洋人から〈服〉を買ったことで死神のカイナマンに取り付かれたことが述べられていた。章の最後では語り手のイギリス人が村長が大事にしていた服を見せられる。

彼はその服を取り上げてみた。黄褐色で、ぼろぼろになっていたがチューダー朝時代のダブルットであることがわかった。350年前の裏切りを思い起こさせる名残であった。(Ibd., p.69)

長い間イギリス人は家を建てると言って彼らを裏切ってきたわけだが、その〈裏切り〉はその時が初めてではなく350年も時代を遡るのである。この〈服〉のイメージは第6章のローリー卿の物語へとつながっていく。

1595年の第一回目の遠征でローリー卿はアメリカインディアを二人イギリスに連れ帰った。自分が確かに西インド諸島へ出かけた証拠をイギリス人に見せるためであった。彼らはレオナード(Leonard)とハリー(Harry)という名前を付けられた。しかし彼らは両方ともホームシックにかかり故郷に帰された。1618年の二回目の遠征でレオナードは姿を現さなかった。健康を害していたからたぶん病死したのではないかと思われる。しかしハリーは姿を現した。「年老いて痩せた裸足のアメリカインディアンの男でイギリスのぼろぼろになった服を着ていた」という報告を聞いたローリー卿は以下のように述懐する。

私は彼をこの地にウィリアム・ハーコートと共に送り返した。それは9年前のことだった。彼はたくさんのイギリスの服を持って帰ってきた。彼は服が好きだった。(Ibd., p.169)

ハリーが持って帰った服と村長の祖父がイギリス人からもらった服は同じ物ではない。しかし、同じ物ではないと読者はわかっていながら、同じ物のような錯覚にとらわれる。〈服〉のイメージが、中間の章を飛び越えてこの二つの章の間で結びつくからである。

第3章において村長は黒人たちが金を探しに来ていたことを語っていた。今度は〈金〉がイメージとなって後の章につながっていく。第6章でローリー卿はジェームズ一世への謀略のかどでロンドン塔に投獄されていたが、南アメリカのガイアナにエル・ドラドすなわち金を見つけに行くことで釈放された。オリノコ川流域のどこかに金鉱が存在すると彼はいつも言っていたからだ。22年前彼はオリノコ川とエル・ドラドの入口を守るスペイン支配下のトリニダード島を襲撃し、その統治者ベリオ(Berio)を捕らえ、彼の口から金鉱の実際のありかを聞き出していたらしかった。またその地に住むアメリカインディアンを自分の味方に引き入れているとも言った。彼は今やそれを証明しなければならなかった。ジェームズ一世は彼に条件をつけた。すなわち、金を見つけられなければ、あるいはスペイン人に危害を加えれば処刑されることになっていた。果してローリー卿



は金鉱にたどり着くことができなかった。おまけにスペイン人の住む村を襲撃したことで自分の息子を失い、スペイン人大使がそのことをイギリスに正式に抗議した。ローリー卿の運命はこれで決ってしまった。長年夢みてきた金を持ち帰ることができなかった彼をイギリスで待つのは死でしかなかった。病気をおして長い航海に耐え、トリニダード島の沖合いで暑さと食量不足と部下の反乱に耐えながらケイミス船長の帰りを今か今かと待ち望んだ彼の努力は徒労に帰した。

その350年後その同じ沖合いの海の上空を一機の飛行機が飛んでいた。ナイボールのそばにはベネズエラ人のソルザノが座っていた。

私は彼の金貨でできたブレスレットを見たかった。彼はそれをはずして私に見せてくれた。それはヴィクトリア朝のソブリン貨であった。さらに彼はシャツの衿を開いて別の金貨を見せてくれた。それは重い金のネックレスに付けられた大きな金のペンダントであった。彼はベネズエラで金を見つけたのだった。(Ibd., p. 229)

この引用の、特に最後の文章を読んで読者は必ずやローリー卿のことを思い浮かべるであろう。そして彼が見つけれなかった金をソルザノが身につけていることで読者はある種のアイロニーを感じるであろう。ここにおいても、ソルザノが見つけた金はローリー卿が探していた金とは別のものである。ソルザノは大工で家を壊していた時に、そこに隠されていた金を見つけたのだった。そしてローリー卿の船が浮かんでいたその上空を350年後ソルザノが金を身につけて飛んでいる。第6章と第7章とは全く独立したエピソードであるが、この〈金〉のリンクで読者は大きな歴史の皮肉を感じる。ソルザノが身につけていた金貨は1818年のベネズエラの独立を記念したもので、その独立にはボリヴァー (Simon Bolivar) が主として貢献していた。しかし、ボリヴァー以前にミランダがその国の独立を目指していた。金のリンクはさらに第8章へと結び付いていく。

〈金〉と〈服〉のリンクは第3章、第6章、そして第8章の〈書かれていない物語〉つまりナイボールが歴史の空白を創造力で埋めた3つの独立した物語を関係づけて一つにまとめた〈小説〉にする働きをしている。この3つの物語はこの二つのリンクなしでは全く独立したストーリーではない。しかし〈服〉と〈金〉というリンクが与えられるとそれらは一個の〈小説〉へとまとまる動きを起こしだす。

### III

『世界の片隅』を全体として眺めた場合、記録あるいは歴史といった〈事実〉の要素がほとんど大部分だと言っても過言ではない。たとえば事実が8割で、あとの残りの2割が創作であろう。しかしその8割の事実もうまくリンクを使って配列すれば〈小説〉となり得る。TLSのインタビューで彼はニュースつまり事実の羅列も小説になり得ると発言していたことはこれを裏付けるものである。

事実と創作の問題に関して、「たとえ何かを観察し経験したとしても、どんな時に創作 (invent) したくなるのか」というインタビューアーの質問に対して、彼は「真実 (truth) を伝える時、つまり現実の形 (form of reality) を伝えようとする時にそうする」と語っている。つまり彼の意見では、現実中存在する人々を取り扱う場合、どうしても細部にわたって描きすぎてしまう。そこでポイントを要約しようとする。その時に創造 (fabricate) しなければならなくなるのである。

『世界の片隅』はカリブ海あるいは新世界の〈背景〉を構成するいろいろなより糸を扱ったもの

で、その背景はこの作品の異なった章で読者に知られるようになっている。そしてナイポールが到達した書き方は彼にとってより真実であり自然であった。彼のストーリーには確かにつながりがあり、それらは同時に〈背景〉と切り放せない密接な関係がある。いくつかのイメージが何度か現れ、同じ登場人物が違った章で言及されるこの書き方によって読者は自分の本質あるいは欲求によって自分なりの本の読み方ができる。ある読者は他の読者が気付かない半ば埋もれた章の間のリンクに気付くかもしれないし、反対に他の読者にとってより顕著なリンクに気付かないこともあるだろう。これは作者自身にも当てはまることである。ナイポールはこのような書き方を「想像的な書き方の美しさの一つ」(one of the beauties of imaginative writing)と呼んでいる。2つか3つのことを意識的に書こうとしている時、書く過程において気持ちが高揚する場合がある。そのような場合今まで意識していなかった他のこと全てが意識にのぼって来ることがある。だからナイポールにとって書き始めてから何カ月かして初めて物事の間にリンクを見つけることもあった。そして奇妙なことに最初は意識してそのテーマを書こうとしなかったのだけれど、傷ついた革命家が主として描かれることになったのである。

ナイポールによれば現代の小説はスケールの小さな〈狂想曲〉であり、時として余りに個人を語りすぎていた。現実を書き留めようとする姿勢はそこには見あたらない。その作業は他のジャンルに移住してしまっただけであろう。たぶんエッセイのようなものがこの混乱した雑多な世界の現実を人々に与えてくれるのだろう。ナイポールは小説とエッセイとの境界を意識的に曖昧にしている。小説にエッセイの役割を与え逆にエッセイに小説の役割を与えている。しかしこれは真新しいものではない。ナイポールは小説を書き始めた時、作家つまり自分は何者なのか、世界を旅している自分は誰なのか、ロンドンあるいは他の都市を観察している自分はいったい誰なのかそのアイデンティティを明らかにするのを感じた。語り手が誰なのか隠すことはできなかった。一度ロンドンを舞台にした登場人物が英国人の小説(*Mr Stone and the Knights Companion*, 1963)をナイポールは書いているが、それ以後彼は同じ設定の小説は書いていない。彼はその素材が優れたものだと思っていた。しかし語り手、つまり物語にとって必要不可欠な観察者を隠すことによってそれを無駄に使ってしまう結果となった。ナイポールにとって小説を自分のアイデンティティを明かさずに、あの全知全能の第三者的語り手として書くことは、ある意味においてその素材を不正に扱っていると思えるのである。

ナイポールは現在、『世界の片隅』にみられるように、いわゆる〈小説〉から離れて記録作品あるいは口述歴史に分類されるような作品を手掛けるようになってきている。彼の心にどのような衝動が働いているのだろうか。彼は二つのものに突き動かされていた。一つはインドに関するような本(*India: A Wounded Civilization*, 1977)を書いている時、彼がこだわった〈正確さ〉であった。彼は人が話したことは一語たりとも変えなかった。もう一つは、作家が到達したいと思う〈想像的真実〉である。たとえば、『世界の片隅』のミランダを扱った「荒廃した湾で」においてナイポールは、読者は気付かないかもしれないが、自分では想像力が働いてうまく描けたという箇所がある。彼は25年間、自分が生まれ育った奴隷社会を書きたかった。ミランダが35年たってベネズエラに帰ってきた時、彼はニグロ(アメリカ黒人)がいないことに気付いた。しかし最初の日に彼は外で聞き慣れない言葉を聞く。窓から外を見るとアフリカ人が働いていた。奴隷をいつもそこに存在させていたのである。つまり、ナイポールにとって〈真実(truth)〉は二つある。彼にとってウィルトシャーで実際に見た人々の生活(*The Enigma of Arrival*, 1987)をそのまま描くことによって〈変化〉という人生観を表現することはできない。だから〈真実〉へと集約していく自分自身の構築物を創造しなければならない。つまり、一つの真実は現実(reality)であり、もう一



つの真実は想像的真実なのである。『世界の片隅』における独立した事実をリンクを用いて想像的真実へと構築していく語りがまさにナイポールの意図した〈新しい物語形式〉であった。

#### Ⅳ

ナイポールはこの作品で傷ついた革命家を主として描いている。そのことは今まで見られなかったことである。また歴史を遡ってトリニダードを取り巻く背景を描いた。それも今までには見られなかったことである。ヨーロッパ人は新世界にやって来て、神聖な彼らの土地を犯した。レブラン、ブレア、そしてミランダはその土地に生まれた人間としてヨーロッパから独立した国を打ち立てようとするが全て徒勞に終わってしまう。黒人の革命家を描いたにしても、あるいは歴史を遡ったにしてもナイポールの主張は今までとは変わらない。つまり〈変化〉に揺さぶられアイデンティティを失った人間を描いてきたのがナイポールであった。しかし、彼は素材が変わらなくても物語形式を変えることによって〈想像的真実〉を伝えることができることを実践した。まさに『世界の片隅』は独創的な作品である。

神父さん、アメリカインディアンである我々とスペイン人やイギリス人との違いは、彼らはこれから行こうとしている所への行き方を知っているので、彼らにとって世界は我々よりも安全な場所であることです。(Ibd., p. 211)